

悲しみは

人と人をつなぐ

糸である

藤元 正樹

『2026年難波別院カレンダー』 8月のことば



掲示板のことば

お母さんのご逝去を縁に初めてお参りをし始めたご門徒のお話です。当初は正信偈を詰まりながらも一生懸命にお勤めし、お内仏のお給仕も確かめながら熱心にされておられました。その事が何より母への供養になると思っておられたそうでした。

それから数年が経ち、今では正信偈やお給仕もすっかり習慣になっておられました。最近ふと最初の頃を思い出されたそうです。その時と比べて、今は仏事を無難にこなすだけで、気持ちが全く入っていない事に気がついたということでした。大切にしているつもりがいつの間にかただの作業になっていたと感じ、母

に申し訳ない、情けない
と思いを吐露されました。

私たちの日常を考える
と、このように大切にして
いるつもりでもそうなっ
ていなかったり、時には傷
つけてしまっていたりと
いうこともあります。残
念ながらつもりの時には
その事に気が付きません。

私たちが仏事を営むこ
との中には、自分の在り
方を問うてくださるはた
らきがあります。つもり
で生きている独りよがり
な在り方に気付かされ、
そのことを恥じ悲しむと
ころから、新しい歩みが
開かれてくるのでしよう。
今どう生きることが大切
な人を本当に大切にす
ることなのかを考え訪ねる、
仏さまは日々大切なこと
を見失う私たちにとって
の道標なのです。

今月のことば

尊者阿難座よりたち

世尊の威光を瞻仰し

生希有心とおどろかし

未曾見とぞあやしみし

とが「影響」という言葉の意味なのでしよう。

毎月のお参りで、学生時代の同級生のお宅に伺っています。いつもご夫婦で迎えて

私たちは、様々な場やものから影響を受けて生活を営んでいます。この「影響」という漢字をみてみますと、影（かげ）と

響（ひびき）という二つの字が合わさって成り立っています。影とは、物体・主体となるものがある。響とは、波のように広がり、余韻として残るもの。つまり、すでにそこにあるものに應じて生じたものが、まるで波のように広がっていく、というこ

いただきますが、今年の十二月だけご主人が不在でした。そんな日もあるだろうと思い過ごし、翌月はご在宅でしたので話を聞くと、体調を崩して入院し、その際に検査をすると末期の癌が発見されたとのことでした。そう話されている時のお姿は、いつもと変わらず明るく前向きでした。

なぜそのように明るくお話ができるのか尋ねると、過去に大きな事故に巻き込まれた経験があり、

ご主人はその事故にあっしてから今日に至るまでは、本来なかった人生を歩んでこれたと思うので、どんなことがあっても受け入れることが出来るようになったとお話くださいました。その話を聞いて、私は今まで彼のほんの一部しか見ておらず、彼という人物を自分のイメージで固定化していたことに気づかされました。

お釈迦様のそばで最も多くの説法を聞いてきた阿難尊者がある日、お釈迦様から眩いほどの光が放たれていることに気づき、思わず立ちあがられました。「生希有心」とは、めったにないという意味でその姿がただごとではないと驚かれたからでした。その時、阿難尊者は

今までに感じたことのない心が生じ、これまでに見たことがない光景に出会った驚きが、この和讃から感じられます。

私たちは人からだけではなく、ありとあらゆるものに影響を受けて「今の私はこのままでいいのか」と問われているように思います。日々の中で自身の価値観が固まりつつあるところに「問い」が生まれることをきっかけとしてそれが打ち壊され、「これでいい」と座り込んだ私を立ち上げさせてくれるのではないでしようか。

（三好 隆紹）

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』（初版）483頁

（第二版）578頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

（青本）127頁

へ知ってる？ 仏事のあれこれ

「お盆」を

大切にしましょう



く仏事はすぐ役立つ？く

守口市 清澤寺 澤田 見

「お盆」は正確には「盂蘭盆会」といい、八月（一部の地域では七月）に行われる伝統的な仏教行事です。俗にこのお盆の期間だけはご先祖の靈魂が家に帰ってくる^{とされ}、迎え火・送り火や精霊馬など、地域によってさまざまな習俗とともに行われています。また近畿地方では八月二十三日あるいは二十四日に「地藏盆」という行事がなされることもあります。地域のお地藏さまを祀ったお堂な

どの前でお勤めをし、子どもたちの名を記した提灯を飾ったり、お菓子が配られたりします。

去年、作家の荒俣宏^{あらいまたひろし}さんのエッセイ集が出版されました。その題名が『すぐ役に立つものはすぐ役に立たなくなる』というものでした。考えてみれば、わたしたちの文明は「すぐ役に立つもの」を追い求めてきた歩みでありました。科学や医学、テクノロジーなどあらゆるものが進歩し、生活を変

えていきました。たしかにわたしたちはそのおかげで、快適さや便利さを享受しています。

しかしその進化のスピードは近年ますます増していき、わたしたち自身がそれについていけず途方に暮れているありさまでです。そしてまた、あつというまに陳腐化し、使い捨てられていきます。つまりあらゆるものが「すぐ役に立たなくなる」のです。

それは言いかたを変え、と、身のまわりのすべてのものを自分の願望や欲望を都合よくかなえる「道具」としているということ。そしてまた、ものだけにとどまらず、わたしたちは人間関係までも道具として使い捨て、

さらに宗教をも便利な道具としてしまっているのではないでしょうか。みずから人々の願いをかなえようとあつ宗教も、この世にはあふれています。しかしわたしたちの宗旨、浄土真宗はそうではありません。ほんとうの宗教というものは、真実の救いというものは、人間の道具にはなり得ないので

す。

「お盆」も、あるいはあらゆるお仏事も、同じことです。自分に都合のよい「すぐ役に立つ」道具として扱うのではなく、仏さまとなつてわたしたちのことを「常に」見護ってくださいている亡きご先祖を、まことの意味で偲ぶ行事として大切に勤めたいものです。



仏教マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ〈253〉

すきま
隙間おじいさん

